熊大教育実践研究　第23号，19－24，2006

台南市域形成と廟創建について

鳥　飼　香代子・蕭　　玉　燕*

The expansion of Tainan City and establishment of the Taoist Temples

Kayoko TORIKAI and Yuyen HSIAO

Abstract

In Taiwan, Taoist temples are often used not only as religious facilities but also as community centers. People are visiting and gathering temples very often, and they communicate each other or just relax there. We chose temples in the city of Tainan as an example for these research topic. Because Tainan is one of the oldest planned cities in Taiwan and also it is the city which has most populated temples in the city center.

Key Words：Taoist temples, community centers, oldest planned cities

1．問題の所在と研究の目的

台湾では近隣社会における重要な施設として廟が利用されている．それは宗教施設としての機能を超えて住民が日常的にそこを訪れ，しばらくの時間滞在する，あるいはそこで訪問者が相互に情報交換や余暇活動をする，いわば集い機能をもった施設としても活用されている．このように住民の生活に根ざした施設である台湾の廟は，1662年に行政府が開かれ，その周辺に市街地が形成されたとき海難信仰の「媽祖」神が移民たちによって持ち込まれたのが始まりといわれている[文1]．つまり廟は台湾の地域社会と共に始まり住民の生活を支えてきた歴史をもつといえる．そこで本研究のねらいは，台湾で最初の廟が建設された歴史をもちかつ最も廟の多い都市といわれている台南市を事例として，廟の立地状況や地域住民の施設利用について探り，集い機能をもった廟の特徴を明らかにすることである．

台南市の廟分布の特徴としては以下の点が指摘できる．①旧市街地に最も廟は集積している．②また廟の多い中心地区で財団法人の廟も多いことから，積極的な廟活動も中心地区に多いといえる．③周辺の地区では，住宅地や集落のあるところに限って廟が存在する．④しかし外省人村には廟はない．

2．調査の方法

台南市７区のうち，古跡指定廟などの創建年度の古い廟が最も多い中区と逆に古い廟が少ない東区を対象に，廟の悉皆調査を実施した．台南市には「神壇」が多いと指摘されているが[文2]，活動内容が個人の占いに限られていることから「集い」利用はないものとみなし，対象からはずした．調査は廟の歴史，管理組織，廟建築の内容，廟庭や立地，そこでの生活道具類の配置情況を写真と図面で採り，地図にプロットする方法であった．調査は2001年１月14日から２月18日に実施した．

3．台南市域形成と廟創建

今日の廟は，古跡と政府が認める古いものから，一見して新しいとわかるものまで多様な年代を示している．そこで廟がどの時代に多く創建されたのかを，人口および市域の面積当たりの増加率から検討する．台湾の歴史は鄭氏時代（移民直後から自力で市域や村を形成した時代），清朝時代（清の支配下に入った時代），日本統治時代，光復後（国民党時代），高度成長期，現在と分けられる[文3]．

人口について以下の数値を採用した．オランダ時代の人口は1640年12月６日のオランダ人バダビヤ（巴達維亜）の日記によると[文4]，中国人は約３,560人，オランダ人1,500～2,000人と記載されている．このときまだ廟は建築されていない．1646年４軒の廟創建の記録がある（図２－①）．1685年蔣毓英の「台湾府志巻七一戸口篇」によると，最初鄭氏と一緒に来た官民は約30,000人余りであるが，戦争や疫病で死亡あるいは環境に慣れないため多くの官民が帰国した．又独身の兵士が中心だったため，人口の自然増加も少なく，清朝に属したとき行政府の人口

* 熊本大学自然科学研究科博士後期課程
台湾南栄技術学院講師

台南城壁図　　清乾隆年間刊『重修台湾府志』城池圖

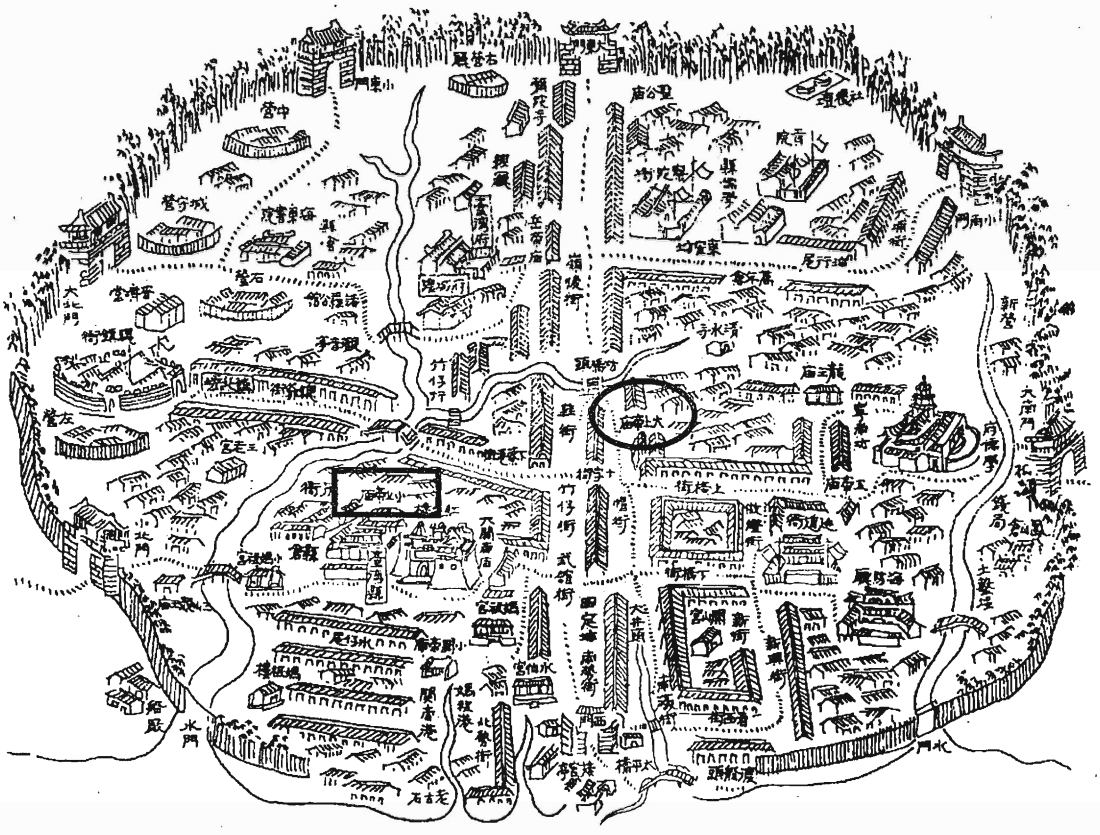

図１　台南市城壁図

写真１　中区の「北極殿」は
図１の楕円形にある「大上帝廟」である．

写真２　中区の「開基靈佑宮」は
図１の四角形にある「小上帝廟」である．

は23,000人へと減少していた．清朝後期の1882年～1891年の人口についてはモンテゴメリィの「台湾台南海関報告書」に「台南城の人口は約50,000～60,000人」と記載されている．1885年台湾は台湾省となり，２年後には省の行政府を台南城から北（現在の台中市）へ移動し，台南城を政府中心とする時代が終焉した．

そのため清朝末年には台南城の人口は約50,000人に減少したといわれる．1895年日本統治時代になり，1900年の「台湾総督府統計書人口調査」によると約60,000人と記載されている．1943年の国勢調査による人口は160,000人である．この後国民党政権に

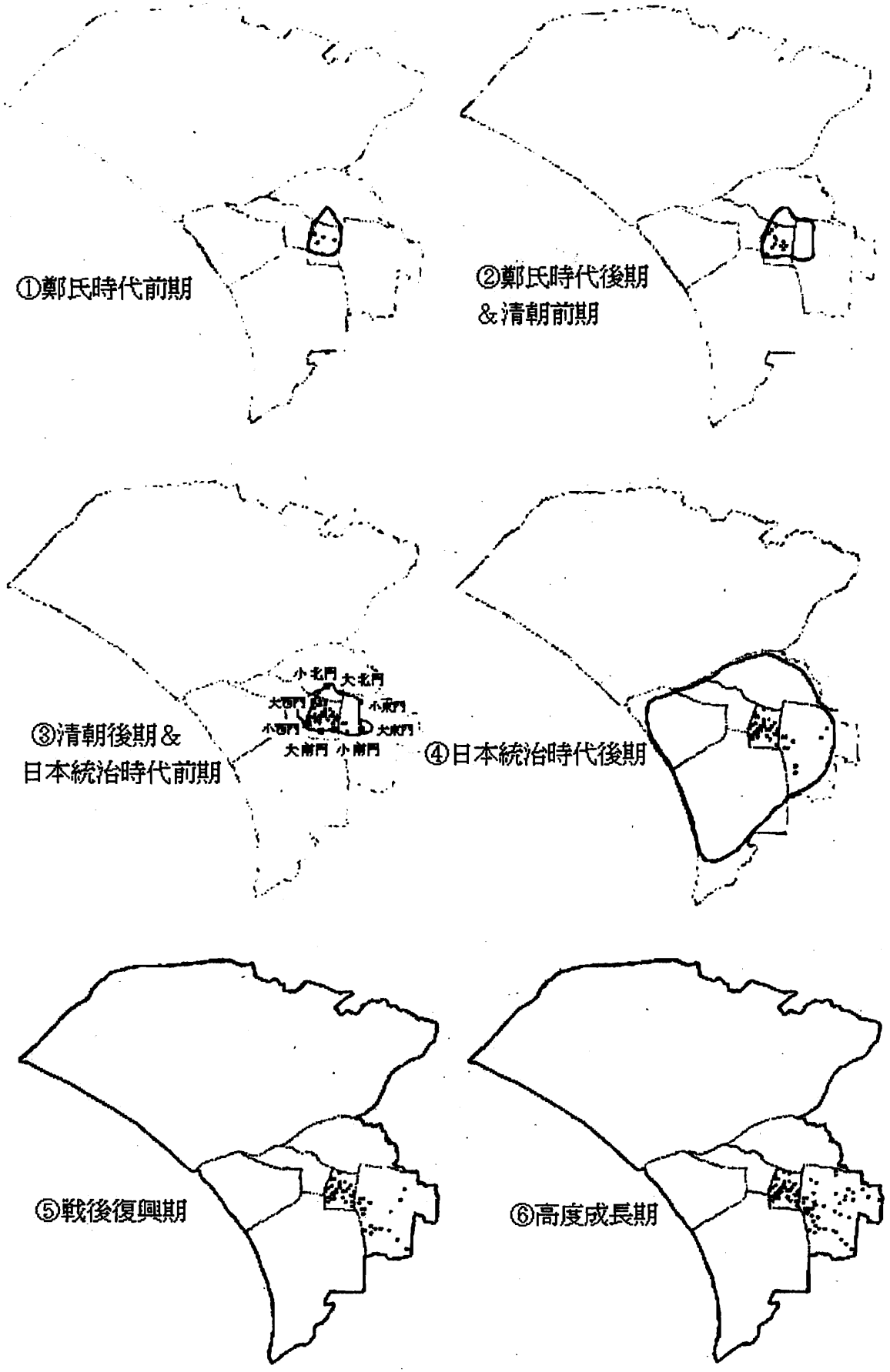

図2　廟の時代別創建動向図

表１　台南市廟の増加と人口増加，市街地の拡大について

年次	1662－1682	1683－1894	1895－1945	1946－1964	1965－1990	1991—2001
期間	20年	210年	50年	約20年	25年	10年
時代	鄭氏時代	清朝	日本統治時代	光復後	高度成長期	現在
人口	約３万→2.3万	約2.3→５万	約６万→16万	約16万→40万	約40万→68万	約68万→73万
面積k㎡	約2.5→ 4	約4→6	約8→59.5	約59.5→175	約175	約177
東&中区・面積				約15.5	約15.5	約15.5
東&中区・人口				約3.6万→11.4万	約11.8→20万	約21万→23万
創建廟合計	13	23/36	7/43	11/54	26/80	0/80
東区	1	4	5	9	24	—
中区	12	19	2	2	2	—
市域名の変遷	承天府	台湾府城→台南府城	台南市街→台南市区	台南市	台南市	台南市

なったが人口は急速に増加し，今日に至っている．続いて面積であるが，これは古跡の建築物や廟の位置から計測した概数である．図２は中区と東区の廟の時代別創建動向をみたものであり，これにより検討する（７地区全部に関してはデータがないため，本悉皆調査より２地区に関して作成）．鄭氏時代の市域は今日の中区程度である（図２－①）．清朝の1723年城門と城壁が完成し，市域は約２倍になった（図２－②）．なお1835年２つの集落を合併し約1.5倍になった（図２－③）．日本統治時代1910年に都市計画が公布され当初の計画面積は約50㎢であったがすぐに拡大し、1921年に２倍，更に1941年に６倍になった（図２－④）．なお，この年から国土調査が開始された．光復後の1946年さらに市域を拡大し，現在の姿となった（図２－⑤，⑥）．表１と図２より，移民直後の廟は破線内の南西に集中していた．この20年間の人口推移は約30,000人から23,000人へと減少，市域の面積は2.5㎢である．このような情況下で多くの廟が創建されている．しかも中区に限られている．次の清朝時代には市域は城壁を中心に現在の中区から東区の一部へと拡大した．人口は２倍になり都市建設は進んだと考えられる．しかし廟創建は少なく，210年間で21軒である．特徴的な点は中区に廟がもっとも多く創建された時代といえることと，市域が東区に拡大したのを受けて東区での廟創建が始まったことである．更に日本統治時代は人口３倍，面積は７倍になったが，50年間で７軒の創建ときわめて少ない．この時代は中区の廟建設は沈静化し，創建の多くは中区以外へと移ったといえる．

中区は日本統治下で台湾府や裁判所，警察署などの政治・行政機構が集中化していた区であり，台湾人の住宅建設は中区以外の周辺区へ移動したことの影響である．清朝，日本と廟に関心のない台湾外勢力の統治が続くと創建は少なくなる．そして独立後，人口3.5倍，面積が３倍になる中で，約20年間で11件と増加し，高度成長期に急増した．この時代から中区と東区の面積と人口が特定できるため概算を試みると，廟の総計は51軒で面積15.5㎢，１㎢当たり約3.3軒，人口１万人当たり約4.5軒である．高度成長期は人口1.5倍，市域の面積は変化しなかったが，廟は25年間に26軒と毎年１軒の割合で建設され，１万人当たり3.8軒である．そして低成長の現在では10年間で１軒しか創建されていない．又中区での創建はほぼ停止したといえる．しかし人口がさほど増えていないことから人口当たりの変化はあまりない．廟が民間人の土地寄進や寄付金で創建されることから，清や日本の植民地時代にの意向を一定受け，創建数が減少するが，完全に創建が絶えることはなかった．そして経済的余裕ができると創建数が急増し，また低成長期には減少する．このように，廟の創建は支配者の意向と住民の経済活動の影響を受けながら，人口増加と市域の拡大に伴い増加してきたといえる．なお市域名の変遷を表１に示した．長期にわたって廟創建をみると，困難な情況下で神頼みとして創建されるというよりは，住民に経済的余裕ができた時に創建が進むことが分かる．なお資料によると，創建された廟は取り壊されるあるいは放置されることはなく，継続的に住民によって維持されていく．したがって，廟の総数は時代とともに増加

していく．

4．増・改・移築からみた廟の変遷と整備方向

古い廟の多い中区には，建築形態が整った⑧タイプが多い．このことから廟は創建当初には簡略型であっても，徐々に整備されるのではないかと考え，この点を検討する．表２は台南市の廟で唯一創建からの変遷をたどることのできる17軒である（このうちの５，11，13は中区にある）．まず歴史的に記録がかなり正確になると考えられる日本時代以降に注目しても，廃廟はない（１つあったが再建されている）ことが大きな特徴である．そしてどの廟も複数回の修復などを経験している．特に回数の多いのは５番であり，元来は官設された廟であったが，16回の増築と修理が行われている．このように廟は絶えず，住民の力で手を加えられ更新しているといえる．

ついで17軒の廟の形態と現在の形態になった年代を確認する．「創建」のほかに「増築」，「移築」，「改築」は形態が変わるので，これらの工事が行われた最後の年度が現在の形態となった年度と考える（表２）．現在の形態での涼亭，付属室，廟庭の有無を検討すると，ここでの特徴は付属室を必ず確保している点である．ついでは廟庭の確保である．日常的な廟の利用には特に付属室が求められるそうであり，又整備の方向もそれを示しているといえる．廟は日常的な使用に答えられるように付属室や廟庭を確保している．

5．廟利用の活発性

廟がどの程度利用されているかを見るために，廟の付属施設の家具や付属物の内容と量を検討する．取り上げた付属物は，香炉や線香を置く台など参拝時に使われるものと，事務室の中を省き，それ以外の付属施設に置かれたもの全てである（表３）．

まずほとんどの涼亭には椅子が置いてある．椅子以外に半分の涼亭にはテーブルもあり，そのためお茶や軽食を採りやすく，長居できる空間を構成しているといえる．ゴミ箱，掲示板，一部に湯沸かしの設備や水道，植木鉢まである．さて涼亭は神の空間である正殿の前にあり，涼亭に居ると神に守られて

表２　台南市17軒媽祖廟の変遷

廟	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
鄭氏	創 1662			創 1668													
清朝	改 1765 修1	創1718 修1 1871 洪水 廃廟		増1	創 1685 増2 修8	創 1755 修3	創 1758 移	創 1788 重1修 2	創 1795 改1 修1	創 1817 改1	創 1845	創 1851	創 1858	創 1871			
日本	修1		創 1913	廃廟	修1		修1 移1		修1	修1	修1	改1	移2	改1	創 1921		
光復	修1	創		移1	修2	修1	増2	重1	移1	改1 増1	改		移1 改1		改1	創 1951 移1	創 1951
高度	修2	改 1	移1	増1 修1	増1 修1	修2	改1	改1		改1	修1	改1	改1	改1	改1 重1	改1	移1
現在				修1	修1												
タイプ	⑧	⑧	⑧	⑥	⑧	⑧	⑧	⑥	⑧	③	⑦	⑥	⑤	⑥	⑥	⑧	⑧

注：●創― 廟の創建．　増―増築．　重― 元の形態のまま建て直す　移― 移築．
修― 形態が変わらなく，修理する．　改― 形態を変えて，新たに建てる．
●一桁の数字は回数である．
●タイプ①正殿，②正殿＋涼亭，③正殿＋附属室，④正殿＋廟庭，⑤正殿＋涼亭＋附属室，⑥正殿＋附属室＋廟庭
⑦正殿＋涼亭＋廟庭，⑧正殿＋涼亭＋附属室＋廟庭
出典：『台南市媽祖廟之変遷』作者― 徐明福，徐福全　1997年７月　台南市市政府出版

表3　廟施設における附属物（家具など）配置状況

廟数 合計80軒 ＼ 付属物		椅子	机	茶沸し	ごみ箱	掲示板	電話	テレビ	扇風機	水道	トイレ	植木鉢	庭木	池
東区 45軒	涼亭のある29軒	24	17	5	8	5	1	2	3	7	—	8	—	—
	付属室27軒	27	27	21	24	10	22	6	26	20	24	2	—	—
	廟庭23軒	11	6	1	6	2	1	—	—	9	3	18	13	3
中区 35軒	涼亭24軒	18	10	3	4	2	1	—	1	3	—	3	—	—
	付属室18軒	18	18	15	17	7	17	2	18	12	12	2	—	—
	廟庭24軒	9	2	2	6	3	—	—	—	7	6	14	12	2
	合　計	107	80	47	65	29	42	10	48	58	45	47	25	5

註：中区2軒不明（建直中）

いる気持ちになるそうであり，神と人間の緩衝空間を構成しているといえる．柱や壁の装飾も正殿に近い．なお電話，テレビ，扇風機などは涼亭の周囲をテントで囲む，あるいは隣の壁を利用するなどして閉鎖性を確保し，収納や事務室の役割を果たせるようにした事例でみられたものである．

付属室は廟の行事連絡や信者への伝言など業務上必要な雑事をする所でもあるので，椅子，机やテーブル，掲示板などが揃っている．さらに行事の時に必要なテントなどの収納空間を兼ねていることが多い．多くの廟は正殿の両袖に付属室をもち，一方は常時開放しており，出入りが自由になっていることが多い．ここに注目しても椅子と机は全ての付属室にある．お茶沸かし，ゴミ箱，電話，扇風機などの保有率も高い．水道，トイレも同様である．付属物の大半は付属室に置かれており，日常的使用や管理運営の拠点になっている．

廟庭は半数近くに椅子や植木鉢，更には庭木があり，水道の敷設も半数近い．池も少数ではあるがみられる．廟庭は大規模なものも一部にはあるが，多くは住宅の庭先あるいは小規模のオープンスペースに近い付属物の置き方である．両地区で比較すると涼亭，付属室，廟庭全てに渡って東区のほうが充実して折り，付属物からみた廟利用は，東区の方が活発といえる．

涼亭，付属室，廟庭に置かれている付属物からみた，日常利用の活発性はきわめて高いといえる．涼亭と，付属室は日常利用と管理業務のために整えられており，更に廟庭は住宅の庭先の役割を果たしているといえる．

6．まとめと考察

廟分布の特徴としては以下の点が指摘できる．①旧市街地に最も廟は集積している．②また廟の多い中心地区で財団法人の廟も多いことから，積極的な廟活動も中心地区に多いといえる．③周辺の地区では，住宅地や集落のあるところに限って廟が存在する．④しかし外省人村には廟はない．

廟は支配者の意向と住民の経済活動の影響を受けながら，人口増加と市域の拡大に伴い増加してきたといえる．廟は日常的な使用に答えられるように付属室や廟庭を確保している．廟は住宅地の中に存在しかつ各住宅から車の通らないあるいは車の少ない路地でアクセスできる，つまり住宅との緊密性の高い結合をした集い施設といえる．更に市街地では多くの住宅は庭を持たないため，廟庭は各住宅の庭代わりを務めるオープンスペースでもある．

涼亭，付属室，廟庭に置かれている付属物からみた日常利用の活発性はきわめて高いといえる．涼亭と，付属室は日常利用と管理業務のために整えられており，更に廟庭は住宅の庭先の役割を果たしている．

謝　辞

本研究は，熊大自然科学研究科の両角光男先生に多くのご示唆をいただき，更に院生や学生に励まされながらまとめたものである．心から謝意を伝えたい．

注及び参考文献

文1）劉枝萬，台湾の道教と民間信仰，風響社，1994
文2）笠原政治．植野弘子編，アジア読本台湾，河出書房新社，1995
文3）周菊香，府城今昔，台南市政府，1995
文4）台南市綜合発展計画―総体発展計画，台南市政府＆国立成功大学都市計画学科，1992